

令和元年6月13日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02329

研究課題名(和文) 19世紀英国大衆演劇とイングリッシュネスの影響関係についての研究

研究課題名(英文) A Study of Influential Relationship between the Nineteenth Century British Popular Drama and Englishness

研究代表者

金山 亮太 (KANAYAMA, Ryota)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70224590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イングリッシュネス意識の発生の起源を19世紀英国大衆演劇に求め、当時のメロドラマに見られる愛国心の発露が、大英帝国の隆盛に陰りが見え始めたころから顕著になってくる外国人恐怖や人種差別意識と表裏一体の関係にあることを示そうとした。研究に着手する以前はアングロ・サクソニズムが明確な形をとるようになったのがヴィクトリア朝期であると考えていたが、有史以来英国は常に外部から侵略されており、自らの混血性が意識されていたことが分かった。この結果、外部からの侵略を受けなかったために純血性を維持していると考えられたゲルマン人への親近感がイギリス大衆芸術の中でも描かれていたことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の結果、今日の世界で最も影響力が大きいことが当然視されている英米圏の文化が、脆弱な根拠の上に成り立っていることが示唆された。このことにより英語中心主義を相対化する視点が得られるとともに、自国中心主義を掲げる英米両国の国民の中にある混血への不安、あるいは白人文化の衰退への恐怖などが見て取れる。有史以来、外部からの侵略を受けてきた歴史を持つイギリス人の中にある混血性への不安あるいは純潔性への憧れは、これとは正反対に、優れたものを掛け合わせることでさらに優れたものが生まれるはずだという理想化に繋がっており、これがアメリカ合衆国のモットーの一つである「多からの統一」に繋がった可能性も考えられる。

研究成果の概要(英文)： This study has tried to focus on the nineteenth century British popular drama as a source of generating the sense of Englishness, and prove that the patriotic mood described in the contemporary melodrama had a close relationship to the xenophobic atmosphere and racial discourse which had started to appear as the British Empire began to lose its hegemony around the end of the nineteenth century. Before this study was undertaken, my hypothesis was that Anglo-Saxonism began to have its clear entity during the Victorian period. However, it turned out that the British Isles have always been invaded from its enemies since time immemorial, and the indigenous people were conscious of their mongrel background.

As the result of this study, I came to the conclusion that the nineteenth century British popular drama has shown how familiar British people had found with the German people, for the latter relatively had kept its purity as an ethnic group.

研究分野：英文学

キーワード：ヴィクトリア朝 大衆演劇 イングリッシュネス アングロ・サクソニズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ヴィクトリア朝の英文学研究と言うとき、従来は小説や詩がその研究対象となることが多く、演劇はフランスを中心としたヨーロッパ大陸の演劇動向の影響下にあったために「イギリスらしさ」を十分に確立させることができず、むしろ劇場形態の変化に対応して観客の歓心を買うメロドラマが主流を占めていたため、脚本の芸術的価値は低いとされてきた。本研究者は、むしろ当時の演劇に見られる大衆への迎合傾向、独創性の乏しさに着目し、大英帝国の繁栄に酔っていた観客の演劇に対する嗜好から、ヴィクトリア時代のイギリス人の本音、換言するならば彼らをイギリス人たらしめていた特徴が探れるのではないかと考えた。すなわち、隆盛を誇った詩や小説だけでなく、大衆演劇にこそ、当時の人々の精神構造がより露骨な、洗練されていない状態で表出しているのではないかという着想が本研究の出発点となっている。そして、このようにして醸成された彼らの帝国意識、言い換えるならば、イギリス人であることに過剰なまでの自負を抱いていたヴィクトリア朝人の自意識が、今日のイギリス人のアイデンティティ形成にどのように反映しているのかを探ることが本研究の最終目的であった。

(2) 本研究においては、これまでの研究成果をさらに発展させるため、ヴィクトリア朝の大衆演劇がどのような場面で言及され、利用されるかを現代の文学や映画を題材として検討し、それらが観客の側にどのような反応をもたらすことを期待されているかを調査することとした。サヴォイ・オペラやヴィクトリア朝メロドラマを映画や演劇の演出上の背景として言及する場合、演出側と観客側はある種の共犯関係を結び、この大衆演劇と縁のない人々の排除が可能になる。そこに現前するホモソーシャルな空間の中にこそ、イギリス人のアイデンティティの拠り所が存在しているのであり、それこそがまさに「イギリスらしさ」を理解する鍵になると考えたからである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、20世紀後半以降の多文化主義の風潮のもとで案出された「プリティッシュネス」(カリブ系移民などの有色人種も包摂する)が明確な像を結びにくいことに対し、アングロ・サクソン系を中心に据えた「イングリッシュネス」についての再定義が検討されるようになったことを踏まえ、ヴィクトリア朝の大衆演劇(サヴォイ・オペラやメロドラマ)が今日のアングロ・サクソン系イギリス人の自己イメージ形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることであった。

(2) 過去20年にわたる19世紀英国演劇の研究で明らかになったことは、この大衆演劇が今日もなお英語圏の国々で根強い人気を誇り、様々な形で日常生活に溶け込んでいることであった。本研究では、英語圏で発表された文学作品や映画、テレビドラマなどにどの程度サヴォイ・オペラやメロドラマが形を変えて生かされているかを、書物だけでなく映像資料なども駆使して探った。愛国的な雰囲気が高まる場面や、あるいはアングロ・サクソン系の人々の精神的拠り所を表象する場面でこれらの大衆演劇が使われるとき、その演出は何を前提とし、何を排除しているのか。サヴォイ・オペラやメロドラマを今日なお鑑賞したり、みずから演じたりする人々が何をこの芝居に見いだしているのかについては、実際に関係者にインタビューを試みるなどして探っていく必要がある。このためにも、上演や作劇の現場を訪れることが不可欠であった。最終的に、サヴォイ・オペラやメロドラマが現代のイギリス文化やイギリス人の民族意識にいかにか根強い影響力を持っているかを本研究は明らかにしようとした。その目的はある程度達成できたが、新たな問題点も見つかった。

3. 研究の方法

(1) 19世紀英国大衆演劇のうち、代表的なメロドラマとサヴォイ・オペラが今日の文学や映画、テレビにどのように引用され、変容を経つつ受容され、それが彼らのイングリッシュネス形成に関わっているかを明らかにするため、イングリッシュネス研究、メロドラマ及びサヴォイ・オペラのテキスト及び映像研究、の二本の柱を中心に研究を進めた。特に、メロドラマに関しては既にある種の固定観念的な見方が広がっており、これを正面から研究することを疑問視する傾向がある。しかし、本研究においては、そのような先入観こそがイングリッシュネス理解を一面的なものに留めている元凶であることを明らかにすることも目的の一つであり、メロドラマ研究に特に力を入れた。研究のための方法論としては、テキスト分析、映像分析が中心になるが、従来のメロドラマ研究の限界を指摘することも並行して行った。

(2) 平成29年度にはイングリッシュネスおよびプリティッシュネス関連の基本文献の収集および分析を継続する一方、毎年夏に連合王国ハロゲート市で開催される「国際ギルバート&サリヴァン・フェスティバル」に参加した。また、本研究の期間中に3種類の異なるシンポジウムに登壇者として参加し、本研究によって得られた知見の一端を披露する機会に恵まれたことは幸いであった。聴衆からは意外な視点からのコメントも得られ、また、研究代表者の問題意識そのものに大幅な改変を求めるような厳しい意見もあり、勉強になる点が多かった。

4. 研究成果

(1) 本研究期間中に3度の研究発表(いずれもシンポジウムの登壇者として)を行ったが、そこに研究中に獲得された情報や考察を盛り込むことができた。いずれの発表内容も最終的には論文あるいは単行本の一部として活字化することができ、研究成果の社会的還元という目的は果たせたと考えている。ただ、イングリッシュネスという概念が予想以上に複雑な成立背景を有していることも明らかになり、19世紀という時代に限定しては十分な研究ができないことが判明した。結果的に、18世紀の仮面劇にまで考察対象が広がることとなった。これは予想外の展開であったが、それと同時に、言説生成の場として新聞・雑誌などのジャーナリズムも研究対象とすべきではないかという指摘を研究発表後の質疑の場で受け、自身の研究スタイルが読者側の見方に偏りすぎている可能性に気づくことができたのは幸いであった。

(2) 2016年度の日本英文学会全国大会におけるシンポジウムでは、メロドラマやサヴォイ・オペラなどといった過去の大衆演劇が、今日のイギリス人観客に複雑な感情を喚起し、結果的にそれがアングロ・サクソン系の人々同士の紐帯になっていることを指摘した。2017年度のワイルド協会におけるシンポジウムでは、サヴォイ・オペラのアメリカ興行に同行したオスカー・ワイルドの中に芽生えたアイリッシュネスとその後の展開について論じ、19世紀末のイギリスにおいて自らのアイデンティティを強調しなかったワイルドの行動原理について考察した。2017年度のディケンズ・フェロウシップ秋季総会におけるシンポジウムでは、ヴィクトリア最盛期の作家ディケンズと世紀末の作家ギッシングを比較する中で、社会全体の教育に対する見方が変化しており、そこでは階級制度に裏打ちされた優位性が揺らぎ、経済力によってすべてがかなえられるといった万能感を持つ人々が増えたことを主張した。本研究と直接つながる内容ではないものの、イングリッシュネス意識生成の背後にある社会観の変化について考察する良い機会となった。以上の3つの発表は、本研究申請時に予定していたピア・レビューに相当するものと考えており、これまでの研究の一つの達成と位置付けると同時に、多くの反省点を見出す契機ともなった。

(3) 本研究の到達点の一つとして執筆した「ジェイムズ・トムソン作『アルフレッド』における民族意識の創造」は、2020年3月に金星堂より刊行される予定の『立命館英米文学論集(仮)』に掲載されることが決定している。これはイングリッシュネス生成の起源を18世紀の仮面劇に求めた論考であり、この劇では中世以降の、アングロ・サクソン系ではないイングランドの国王の聖霊が、古代イングランドの王アルフレッドを激励するという時代錯誤的な「国生み神話」が展開される。この神話構造の中に、異人種の集合体であるとダニエル・デフォーに喝破された18世紀初頭のイギリス人が、徐々に一つの国民意識を共有するきっかけがあったことを論じたものである。これは日本英文学会全国大会に研究発表用に投稿して却下された元原稿を大幅に改稿したものであり、今なお未熟な議論ではあるものの、今後の研究方向を定めるために書かれる必要のあった論文である。反省すべき点や改良すべき点などを検討しながら、この仮説をより強固な論拠によって着実に論証していくことが今後の課題となる。

(4) 19世紀大衆演劇の分析から出発したイングリッシュネス研究は、結果的に18世紀にまでその研究対象が遡ることになった。ヴィクトリア朝にその頂点に達したと考えていたイギリス人の優越意識は、この時期に中世のアーサー王伝説やロビン・フッド伝説の復活という形でそのルーツを求める動きがあった。この点を考慮するならば、その発生源は最終的には中世以前に求めるべきであることが明らかである。いわゆる新・中世主義、すなわち19世紀の視点で中世を見つめ直すまなざしの中には、自分たちの民族的歴史の分岐点をノルマン・コンクエスト以前に想定していたヴィクトリア朝人の発想が認められる。今後は、ヴィクトリア朝の大衆演劇ならびに18世紀の風習喜劇を引き続き研究対象としつつ、その一方で新・中世主義を支えるメンタリティについても研究を進めていきたい。この場合、文学作品だけを題材としているだけでは限界があるため、世相を反映しているもう一つの活字メディアであるジャーナリズム、すなわち文芸雑誌や新聞にも調査の手を広げる必要がある。次年度の科研費・基盤研究(C)申請においては、上記のような点を踏まえた研究計画書を作成する予定である。そのための準備論文を今年度中に勤務校の紀要あるいは所属学会の雑誌に投稿することを考えている。

(5) 本研究を進めている間に本務校が変わったため、1年目と2年目以降で事務手続きなどの点で異なる点などがあり、2年目の研究が少し後手に回ったことは反省点である。ただし、結果的に現任校の豊富な文献や研究上の支援を受けることが可能になったため、むしろ研究対象を広げすぎてしまったことへの反省がある。本研究者がこれまで設定してきた「ハイ・カルチャーの文学vsサブ・カルチャーとしての大衆演劇」という図式の中に、ジャーナリズムという、良くも悪くも政治的な色彩を帯びた言説が混じると、議論が錯綜してくる可能性がある。しかし、イングリッシュネスという概念自体が極めて政治的な意味を強く持つものである以上、自身の作り上げた図式をいったん棚上げにする決断も必要であろうと考えている。また、『サヴォイ・オペラ』の翻訳が完全に停滞し、それと共に『サヴォイ・オペラ大全』の執筆も滞っていることは反省点であり、今年度はこの方面での進展を期している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

金山亮太、『ペイシャンス』から『ユートピア有限会社』へ ワイルド、アメリカ、アイルランド、オスカー・ワイルド研究、査読有、第16号、2017年、77-93

金山亮太、メロドラマがつなくもの、立命館英米文学、査読有、第26号、2017年、1-20

〔学会発表〕(計3件)

金山亮太、教育は誰のためのものか、(シンポジウム:「ディケンズとギッシング 隠れた類似点と相違点」)、2017年度ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会、2017年

金山亮太、『ペイシャンス』から『ユートピア有限会社』へ ワイルド、アメリカ、アイルランド、(シンポジウム:「ワイルドを取り巻く視覚芸術 絵画、映画、サヴォイ・オペラ」)

日本ワイルド協会第41回大会、2016年

金山亮太、メロドラマがつなくもの、(シンポジウム:「メロドラマの諸相」)、日本英文学会第87回全国大会、2015年

〔図書〕(計2件)

金山亮太、他、金星堂、『立命館英米文学論集(仮題)』、ジェームズ・トムソン作『アルフレッド』における民族意識の創造 2020年3月刊行予定、240(1-25)

金山亮太、松岡光治他、大阪教育図書、『ディケンズとギッシング:底流をなすものと似て非なるもの』、教育は誰のためのものか 社会から個人へ 2018年、298(91-106)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。